４　ローリングドッジボール

Ⅰ　競技の特性

ドッジボールはポピュラーなスポーツであり，全国大会などでは高度な戦術を立ててゲームが行われている。
ドッジボールを車椅子で行ってみると,スピーディーな攻防ができない場合が多い。ボールに対して向きを変えて対応するということは難しい。また，ヒットした後のボールは，ほとんどがフロアに転がってしまうために，捕球が難しくなる。
そこで，アレンジを加え，スピーディーさを欠くことなく，さらに障害の程度にも対応できるように考案したものが，このローリングドッジボールである。
特性は，ボールを転がしてコート内の相手にぶつけるというものであるが，従来のドッジボールと違い，一定時間，攻撃側は攻撃し続け，防御側は防御し続けるというように，攻防をはっきりと区別した点にある。

Ⅱ　施設・用具

1.施設
屋内外に問わずに行えるが，ボールを転がすため，地面やフロアがフラットな状態であることが必要である。

2.コート
参加者の人数にもよるが，バレーボールのバックゾーン(８ｍ×９ｍ)，あるいはバドミントンのハーフコート(6.1ｍ×6.7ｍ)を使用する。

3.用具
(1)ボール…ドッジボール，あるいはドッジボール大のスポンジボール
(2)ストップウォッチ
(3)得点板

Ⅲ　競技の方法

1.人数（チームの編成等）
２チームに分かれて対戦を行う。１チームの人数はコートの広さによるが，６～８人程度がよい。

2.競技の進め方（図１）
(1)各チームの代表がじゃんけんを行い，先攻・後攻を選択する。
(2)先攻チームはコートを囲むようにポジションをとる。
(3)後攻チームはコート内にポジションをとる。
(4)審判の笛を合図に試合は開始され，攻撃チームはコート内へボールを転がし，相手の身体あるいは車椅子に当てることで得点を得られる。２分以内に何人に当てる(ヒットする)ことができたかで勝敗を競う。

3.攻撃側のルール
(1)ヒットさせる場合のスローは必ず転がっていなければならない。バウンドしたり，直接ヒットしたりした場合は無効となる。
(2)ラインを踏めば，ヒットしても無効となる。
(3)(1)と(2)のいずれの場合も審判が反則と判断した時点で，攻撃チームの一番近く

にいるプレーヤーに審判からボールが渡され，審判の笛の合図で試合が再開される。
(4)攻撃チーム同士でボールをパスする場合のスローは特に制限はない(転がさなくてもよい)。

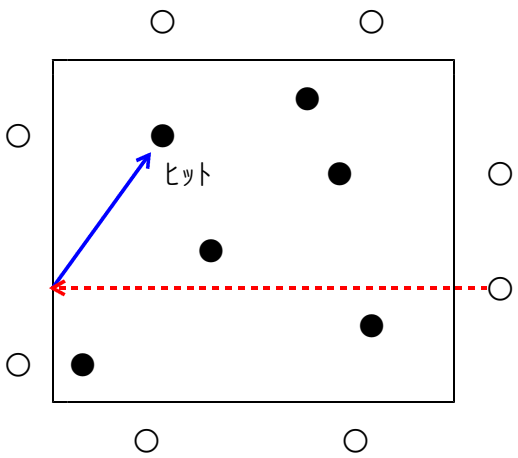
4.防御側のルール
(1)ボールをキャッチすることはできない。

5.その他のルール
(1)ヒットした場合には審判が「ヒット」と言い，ヒットされたプレーヤーはコート外に出る。
(2)ヒットしたボールを攻撃側が捕球した場合には，試合は継続される。
(3)ヒットしたボールがコート内で静止した場合には，審判がそのボールを一番近くにいる攻撃チームのプレーヤーに渡す。その場合には，審判の笛の合図でゲームは再開される(攻撃チームの投げたボールに勢いがなく，ヒットせずにコート内で静止した場合も同じである)。

6.勝敗の決定
１ゲームのイニングを５回とし，５回終了時点で得点が多いチームの勝ちとなる。１回の攻防は各２分間であり，２分間でヒットしたプレーヤーの数がそのまま得点となる。

Ⅳ　その他

1.競技の発展とアレンジ
(1)ボールを複数使用する(例えば，制限時間１分が経過した時点からボールを２個に増やすなど)。
(2)制限時間内に全員がアウトになってしまうことが多い場合には，
①コートを広くする。
②制限時間を長くする。
③全員ヒットした時点での残り時間により，加点される(表１参照)。



○　●：選手
→　：ヒットさせる場合は転がす
⇢　：攻撃側のパスは，転がさなくてもよい

図１　コート

時　　間	加算される点数
試合開始～３０秒未満	５点
３０秒以上１分未満	４点
１分以上１分３０秒未満	３点
１分３０秒以上～終了	２点

表１　残り時間による加点換算表